



TITLE:

貨幣価値をめぐるリカードゥとマルクス (出口勇藏教授記念號)

AUTHOR(S):

行沢, 健三

---

CITATION:

行沢, 健三. 貨幣価値をめぐるリカードゥとマルクス (出口勇藏教授記念號). 經濟論叢 1972, 109(1): 18-40

ISSUE DATE:

1972-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/133454>

RIGHT:

# 經濟論叢

第109卷 第1号

## 出口勇藏教授記念號

---

献 辞	大 野 英 二	
社会科学の「科学性」	河 野 健 二	1
貨幣価値をめぐるリカードとマルクス	行 沢 健 三	18
資本と分配の理論について	菱 山 泉	41
ルカーチとハンガリア・ソヴィエト共和国	平 井 俊 彦	64
W. バジョットのアダム・スミス論	岸 田 理	85
実質費用論と機会費用論	高 橋 正 立	108
B. B. ベルビーフレロフスキー論序説	松 岡 保	131
晩年のマルクス覚え書	田 中 真 晴	150

出口勇藏 教授 略歴・著作目録

---

昭和47年1月

京 都 大 學 經 濟 學 會

# 貨幣価値をめぐるリカードと マルクス

行 沢 健 三

## I は し が き

世界経済の現実問題の咀嚼に追われている筆者にとって、出口教授の退官を記念する特集号で、古典派経済学の所論を検討する機会をえたことは、20年も以前に言及して十分な展開をなしえないうでいた課題を再検討する機会を与えられたことになるのである。そのうえ、その課題の解明は、ドル危機の表面化とともに、更めて姿を表わした難題、すなわち国際経済関係の根底にある深淵ともいべき根本問題である諸国民通貨の関連の問題の解明に、一条の光をなげかけることが期待されうるのである。

その課題とは、諸国民の生産諸力の発展と国際収支調節の過程の基礎にみられる貨幣の対外価値ひいては諸国民労働力の間の賃金の国際的差異の変化にかんするメカニズムの問題である。本稿で、筆者はこの問題にかんしてリカードとじしんの見解の意味を明確にするというよりも、かれの見解の中に、さらに議論を伸展させる手がかりがあるかどうかを学説史的にたしかめてみたいのである。

この側面で最近の顕著な業績は、J. R. ヒックス教授の長期ドル問題論であるということに異論をさしはさむ人は少ないであろう。かれの考察は戦後のドル不足期に行なわれたものであるが、その論文の前半の課題すなわち、「生産性の不均等な発展が貿易に及ぼす効果についての正しい理論」<sup>1)</sup>の追究に関連する部分は、ドル危機という「現代的課題」の研究にも役立つであろうと思われる

1) J. R. Hicks, "The long-run dollar problem, An Inaugural Lecture II," *Oxford Economic Papers*, Vol. 5, No. 2, June 1953, p. 122.

る。これに対して、わが国のマルクス経済学のこの分野での研究は比較的の不毛であった。私見によれば、その原因の一半は、マルクス訓誥学にもっぱら従事して現実問題の展開に切りこむような問題提起を行ないえなかった消極さにも求められるように思われる。マルクスのこの分野でのリカードゥ理論に関連する諸命題は断定的なものであり、マルクスを通じてそれ以前の理論史をみようとする傾向の強かった学説史研究の汐流は、そのばあいにもリカードゥの側からマルクスの主張の意味をたしかめることの必要を感じさせることが少なかったものとみられる。

## II マルクスのリカードゥについての命題の包括度

それでは当面の問題についてのマルクスの諸命題はどのようなものであったか。それらの中でもリカードゥを決定的に葬ったものと解釈されている命題は『経済学批判』の「流通手段と貨幣にかんする諸理論」において、つぎのような脈絡のうえで述べられている。すなわち、マルクスは貨幣数量説の代表的な論者としてヒュームを槍玉にあげたのち、リカードゥの貨幣についての一般の見解を高く評価している。それによると、リカードゥは金銀の価値を他のすべての商品の価値と同様にそれらに対象化されている労働時間の量によって規定しており、価値の章標としての貨幣はかれにとっては一定の金量の章標を意味しヒュームのばあいのように、諸商品の無価値な代理物としてはいない。ところが、マルクスによるリカードゥの貨幣論の肯定的評価はここまでであって、問題が貨幣価値の国際的な側面になるとともに否定的な評価に転じて、つぎのようにいうのである。

「リカードゥがなめらかにすすめてきた叙述を突然にうちきって逆の見解に変わるところで、かれはいきなり貴金属の国際的流通をとりあげ、こうして無関係な視点をもちこんで問題を混乱させてしまう。」<sup>2)</sup>〔引用、1〕。

2) K. Marx, Zur Kritik der politischen Ökonomie, Erstes Heft, *Karl Marx-Friedrich Engels Werke*, Bd. 13, Dietz Verlag 1961, S. 145, 杉本俊郎訳『経済学批判』, 国民文庫(大月書店1966年新訳) p. 226. —以下では *Kritik*, S. 145, 訳, p. 226 と略記。

そこで、マルクスは、自身の主張を明らかにするために、うえの〔引用, 1〕にすぐひきつづいて、「人為的な付随的な論点を除外」し、「したがって、金銀の鉱山を貴金属が貨幣として流通している国の内部に移し」て考えようとする。つまり、ここでのマルクスの主張はこうである。リカドゥは貨幣の価値について一面で正しい理解を示しながら、複数の国民経済の登場するいわゆる *open system* に考察の舞台を移した途端に混乱した見解におちいった。この欠陥を明らかにするためには、いわゆる *open system* において非産金国を登場せしめるのではなく、考察の舞台を *closed system* で金も自国内で生産されているばあいにも引きもどして問題を単純化ないし純化して考えることが適当である、というのである。

これにつづくマルクスの主張をここで再生する必要はないだろう<sup>3)</sup>。ここでは、このようなマルクスのリカドゥ批判によって、わが国の「マルクス経済学者」がリカドゥ理論を、ひいては国際収支の調節過程の後にのべる一側面を、とりあげる視角が固定化させられ、むしろ凍結させられてしまったことは否定できないことを指摘しておきたい。これに対して筆者はこう考える。つまり、このようなマルクスの主張は、リカドゥの『経済学および課税の原理』（以下『原理』と略称する）において展開した貿易論の意義の過小評価につながらないだろうか。あるいは、むしろ、リカドゥによるそこでの推論が読者に与える示唆、ないしは、そののいっそうの展開、を封じることになるのではないかと。

この問題を考えるうえでまず第一に明らかにしておかなければならぬことがある。私はすぐうえでリカドゥが『原理』において展開した貿易論といったが、リカドゥによる貴金属の国際的流通にかんする主な議論は、2箇所すなわち、1810年前後の「地金論争」の時点におけるパンフレットや手紙と、1817年に初版が出された『原理』の該当箇所、とくに第7章「貿易論」の中でいわゆる比較生産費説の命題をのべたあとで貴金属の国際的配分についてのべる箇

3) その骨子は後出、本稿36ページ参照。

所とにみられるのである。ところがリカードが労働価値説に属する命題を明確に述べたのは『原理』においてはじめてであり<sup>4)</sup>、当然貨幣素材たる金銀の価値についてもそうである。だとすると、「逆の見解に変わるところで……いきなり貴金属の国際的流通をとりあげ……」とのマルクスの批判が対象とすべきであったのは当然、リカード『原理』第7章における関連箇所であるべきはずである。ところが、マルクスがさきほどの〔引用、1〕のあとで引き合いに出している貴金属の国際的流通についてのリカードの見解は、むしろ『原理』以前の「地金論争」時点でのリカード文献に属するものが多い。もし、リカードの見解が労働価値説にかなって『原理』の前後で変っていないのならそれでもよいともいえるが、実際にはそうではない。またかりに、たとえそうであっても、第一に、〔引用、1〕にいう「逆の見解に変わるところで……」以下にのべられたマルクスによるリカード批判について、『原理』におけるリカードの叙述に即して立証を要請することには論理的に何ら無理はないばかりか、それが叶えられれば論理的にもっとも斉合的な立証となることは議論の余地のないところであろう。

### III リカードの「付加的な」論点

さて、それでは、『原理』に即してみると、リカードの貴金属の国際的流通に関連した考察は、「無関係な視点をもちこんで問題を混乱させてしまう」ような「人為的で付随的な論点」ではなくて、何か問題の解決に役立つ新しい展開の手がかりを掴むために必要なものであったといえるのであろうか。

この点については、筆者ははじめに言及した1951年の論文<sup>5)</sup>において示唆し

4) この点については、次の文献を参照。Hollander, "The Development of Ricardo's Theory of Value", *Quarterly Journal of Economics*, Aug. 1904; 堀経夫『リカードの価値論及びその批判史』、岩波書店、1929年。行沢健三、リカードの論理構造、『経済論叢』第67巻第4・5号、1949年。全集刊行以後の研究水準を代表するものとしては、R. L. Meek, *Studies in the Labour Theory of Value*, 1956. の第3章。

5) 行沢健三、リカードの物々交換貿易、(一)および(二)、『経済学論究』第5巻第1号、第2号、1951年。

たことがあるので、くわしいことはそれに譲り、当時充分に明確にしていなかった点をも加えて敷衍、整理してみると、ここでのテーマに関連したリカードの『原理』における所説はつぎのような意味をもっていたといえるだろう。

まず、貨幣素材としての金・銀の価値、および貨幣の流通数量にかんする見解は本稿で主として問題となる『原理』第7章よりはるかのちの第27章「通貨および銀行」(On currency and banks)において簡明にのべられている。いわく、「金および銀は、あらゆる他の財貨とおなじく、それらを生産し市場にもたらすに必要な労働の量に比例してのみ価値をもつ。」そして、「一国で使用することができる貨幣の量はその価値に依存する。」<sup>6)</sup>

これに対して『原理』第7章の「貿易論」での問題の箇所では、「付加された」論点は何であったか。この点を検討するためには、まず、つぎのことを想い出す必要がある。すなわち、リカードは『原理』第7章「貿易論」で貴金属の国際的配分の問題を考察するためにあげた例では、貿易当事国の一方で産業部門の生産に改良があった(具体的にはイギリスのぶどう酒生産の改良)ことに考察の山登点をおいていること、である。

このような考察の意義をリカードをして語らしめよう。すなわち、

「この書のこれまでの部分では、議論の便宜のために、貨幣はつねに同一の価値をもつものと想定してきた。いまやわれわれは、貨幣価値の通常の変動、したがって全商業世界に共通の変動、の外に、特定の国において貨幣がこうむる部分的変化もまた存在すること、したがって、事実、貨幣の価値は相対的課税、製造業の技術、気候上の利点、自然的産物、その他多くの原因によって、どの2国をとっても決して同じではないことを示そうと努力している。」<sup>7)</sup>〔引用、2〕

1951年の拙稿では、この〔引用、2〕に言及されている貨幣の価値の変動をその原因に従って3つのケースに分けている。まず(a)のケースとして、通常の変動(ordinary variation)といわれている金そのものの生産事情の変化によるもので、このばあいの貨幣の価値の変動はすべての国に共通に作用する。つぎに

6) *The Works and Correspondence of David Ricardo*, Vol. I, ed. by P. Sraffa, Cambridge U. P. 1951. —以下、*Works*, I と略記— p. 352.

7) D. Ricardo, *Works*, I, pp. 142-3.

(b)のケースとして、ある一国に特有な商品生産事情の変化にもとづくもので、その国(非産金国)の金の自然価値を変化させる。さいごに(c)のケースとして、生産事情以外のある一国に特有な変化で、このばあいにはその国の金のいわば市場価値をその自然価値から逸脱させるのである。

そして、以上の3つのケースのうちさきほどすでに言及した貿易当事国の一方におけるぶどう酒生産の改良の例をあげての考察は、いうまでもなく(b)のケースにあたる。このケースにおいては、特定国(非産金国)における金以外の生産物にみられる生産性の変化に応じて、新たな金の価値と旧価値との一時的な離反が生じ、それにもとづく取引上の攪乱がまず貿易収支の不均衡として生じ、結局新たな均衡化にいたる過程を考察したものである。そしてのちにのべるように、その理論的なねらいは一国の相対的生産性に応じてその国の金の相対的価値が新たな水準におちつくまで、したがって、その国の新たな金の価値に応じた貨幣流通量が実現せられるまでこの均衡化の過程はつづくことを、立証しようとしたものである、と理解することができるだろう。

筆者はリカードがこの箇所では論じていることを敷衍して以上のように理解するのであるが、このように結論的な命題をあらかじめのべたので、ここでもリカードに即していくつかの論点を明らかにしておかねばなるまい。

まず、理論的な重要度からすると、上述の(b)と(c)のケースがどうして分けて考えられているのか、という疑問が生じるだろう。うえの〔引用、2〕では、特定国に部分的にのみ生じる変化として、いくつかの原因が列挙されているが、それを(b)、(c)の2つのケースに分けたのはリカード解釈としてかなりの作為を加えたうえでのことかどうかが問われるだろう<sup>8)</sup>。だが、このばあい、作為は加わっていない。すなわち、リカードは〔引用、2〕の少しあとの箇所ですべて諸国の貨幣の価値は、「製造工業の進歩が未だ幼稚な」段階では、主として貴

8) この問いは単なる学史的せんさくではない。何故なら、単にリカードの理論的含意が問われているばあいにはリカードじしんの述べたこととそこから想をえて理論的に拡張したことの区別はさして問題にしないでもよいばあいがある。しかし、ここではそういう意味でのリカード経済学が単に問題になっているのではなくて、マルクスのリカード解釈の当否が関わっているので、いまの論点を明らかにしておくことはとくに重要なのである。



金属を産出する鉱山からの距離によって左右され、技術と改良が進んで各国が特有の工業に秀でた段階では、貴金属の価値は主として「製造工業の優劣」によって左右されることを明らかにし<sup>9)</sup>、そのうえでつぎのようにいっている。すなわち、

「これらが、私の信じるところでは、世界の種々の国々における貨幣の相対的価値 (the comparative value of money) を専ら左右する2つの原因である。というのは、課税は貨幣の均衡の攪乱をひきおこすとはいえ、それが課せられた国から技術、勤勉および氣候〔など生産性に関連する諸事情——行沢〕のもつ利点の幾分かを奪うことによって攪乱をもちこむわけである。」<sup>10)</sup>〔引用、3〕

つまり、「2つの原因」とは、(b)のケースにあたる特定の国の生産性に関連する諸事情であり、これに対して、課税は(c)のケースにあたり、金の生産の側にもその他の財貨の生産の側にも変化がなくて、しかも均衡が攪乱され、結果としてはいわば自然的均衡ではなくて人為的な均衡に至るわけであるがそのばあい、「全世界の資本の最良最善の配分」を妨げるのである。この(c)のケースについてのリカードの考察は第9章「粗生産物の課税」において示されている訳である<sup>11)</sup>。

つぎに、ほとんど自明のことではあるが、ここでは、「諸国の貨幣の相対的価値」あるいは「諸国の金の価値の差」とかいつているように、非産金国における金の価値の差が問題になっており、そのばあい、これら非産金国での金の価値とは、一定量の(輸入)金と引換えに輸出された財貨の価値によって測られるとされている。このことを推定せしめるものとして、うえの〔引用、3〕の結論をひき出す考察において2つの原因のうち第一のものについて論じているつぎのパラグラフがあげられる。

「もしすべての国が穀物、家畜と布地のみを生産し、これら生産物の輸出によって、産金国ないしその宗主国から金を入手していると想定しよう。そのばあい、金は当然にイングランドよりもポーランドにおいてより大きな交換価値をもつことになるだろう

9) D. Ricardo, *Works*, I, pp. 143.

10) *Ibid.*, p. 145.

11) 詳しくは第9章の論旨を以上の脈絡のうえで検討した注5)の拙稿を参照。

う。けだし、穀物のようなかさ高い商品をより遠い宛先に届けるためのより大きな費用と、さらに金をポンドに送ることに伴うより大きな出費とがその原因である。」<sup>12)</sup>

結局、ここでは、金を自国で生産するばあいの金の価値と貨幣数量との関係、つまりいわゆるクロズド・システムでのその関係が問題ではなくて、(1)いわゆるオープン・システムにおける非産金国での金の価値が問題である。(2)そのような「付加的な論点」をもちこんだのは非産金国での金以外の一般財貨の生産性に变化が生じたばあいの諸国間の貨幣の相対的価値の変化を考察するためである。そして、(3)その考察を通じて、ある一国の生産性の変化によって過渡的に生じた攪乱が新たな均衡に至る過程とは、国民的生産性の相対比に応じて、諸国の貨幣流通量が新たな貨幣の相対的価値に応じた水準におちつくまでの過程であり、そのような、つまり調節過程の途中において、諸国の物価水準の高低が貨幣の流通量との関係で問題とされるのである。(以上、主張(1),(2),(3),)

リカードの「付加的な」論点およびそこから示唆される理論的帰結は以上のように理解されるのであるが、なお、一、二の註釈をつけ加えておきたい。

註釈の第一は、さきの〔引用、2〕のはじめに、「この書ではこれまで議論の便宜のために、貨幣はつねに同一の価値をもつものと想定してきた」とのべられている点についてである。のちにのべるようにマルクスは貨幣数量説の代表的な論者として、ヒュームの所説をとりあげて検討したさいに、「流通手段の数量と商品の価格運動との関係についてのあらゆる科学的研究は、貨幣材料の価値をあたえられたものとして、前提しなければならない。……」<sup>13)</sup>とのべているが、リカードにも同じような考察の便のための単純化ないし純化の想定があったことは、〔引用、2〕のいま指摘した箇所からも推察される。念のために「この書のこれまでの部分 (the former part of this work)」に、この点に言及した箇所を確かめておこう。たとえば、リカードは『原理』第1章、第

12) D. Ricardo, *Works*, I, p. 144.

13) K. Marx, *Kritik*, S. 135, 訳, p. 211.

6節「価値の不変的尺度について」<sup>14)</sup>において、「価格と価値とが測定される尺度そのものの価値に起りうるような変動を毎回顧慮するという煩わしさを免れて、直ちに他の財貨の変動を論じる」ことができるという利点を考慮して、「金で作られた貨幣がほとんどの他の財貨と同じ変動を免れないことは十分に認められながらも、私はそれを不変なものと想定し、したがって価格上における一切の変動は、そのばあいに論じられるべき財貨の価値に関連したなんらかの変動によってひきおこされたものと仮定するであろう」<sup>15)</sup>とのべている。このことから推測されるように、リカードは貨幣価値を一定として論じた方が適当なテーマがあることはもちろん意識していたのであり、あるいはそのためにこそ『原理』においてその理論的基礎となる労働価値説に到達したものといえるほどである。したがって、少なくともリカードの意識においては、それまでの貨幣価値不変の前提をとり去るばあいには、そのことが論理的に要請されるようなテーマへとかれの考察が進められてきたからである。くりかえすようだが、そのような段階での考察の内容はさきの〔主張(1), (2)〕で明らかにしたとおりである。

註釈の第二として、『原理』におけるリカードゥじしんの言葉をかりて、この節で筆者が考察した問題のいわば全容を見わたしておきたい<sup>16)</sup>。

「貨幣は、それが外国より得られた一貨物である為め、それが全文明諸国間における一般の交換媒介物である為め、また併せて、その商業及び機械の上における改良、及び増加する人口に対し食料及び必需品を獲得する困難の増大する度毎に、常にこれ等諸国間に分配せらるるその割合の変動することの為め、不断の変動を免れぬ。交換価値及び価格を左右する諸原理を述べるにあたっては、われわれは注意して財貨その

14) ただしこれは『原理』第3版で新たに付け加えられた節である。(編註『経済原論—各版全訳—』弘文堂1928年、参照)。

15) D. Ricardo, *Works*, I, p. 46, このような単純化によって、マルクスとリカードゥとは明らかにしようとした現実の客観的關係はちがっており、別のテーマを追求しながら、論点の明確化のために同じ単純化の想定を認めたのである。しかしこれを詳しく論じるのはここでの問題ではない。

16) D. Ricardo, *Works*, I, p. 48, なおこの一節は『原理』初版から存在している。この引用によっても、(均衡においては)物価水準は、貨幣数量によってではなく、一方では貨幣価値、他方では財貨の価値に関する事情によって定まると理解されていたことは明白であろう。

ものに属する変動と、価値を測定したは価格を表現する媒介物の変動によって惹き起こされた変動とを、区別しなければならぬ。」

#### IV マルクスによる貨幣数量説の批判

『原理』に即してみると、リカードの貴金属の諸国間の配分にかんする所説のもつ含意は以上のように解される。そのうえでつぎに、マルクスがこの点にかんしてリカードを批判した論旨をさらに立ちいってたしかめることにしよう。

そのまえに、この問題にかんしてマルクスの見解は『経済学批判』(1859年)と『資本論、第1巻』(1867年)との間では変っていない、つまり見解の継承関係は明らかであるとみなしうることを、をことわっておきたい。この点は『資本論』「第一版への序言」でマルクスがのべているように、『経済学批判』の内容がこの『資本論』の第1章に概括され、そのさい叙述の改善が試みられているわけである。他面では、価値理論および貨幣理論の歴史にかんして述べた箇所が『資本論』では削られている。そこでここでは、ヒュームやリカードの理論に直接に関連したマルクスの見解は主として『経済学批判』から採り、貨幣の諸機能に関連した見解については主として『資本論』の叙述にしたがってみることにしたい。

IV-1 price revolution のもとでの流通手段と物価——ヒュームについてのマルクスの評言——

マルクスは『経済学批判』の中の「流通手段と貨幣にかんする諸理論」において、重金主義と重商主義は、「貨幣を流通の結晶した産物としての形態規定性」だけで知っているにすぎないものときめつけ、これに対して古典派経済学は、それを「その流動的な形態」、「流通手段としての形態規定性」において捉えたことを指摘し、じっさい上、金属流通に直面した古典派経済学は「金属貨幣を鑄貨として、金属鑄貨をたんなる価値章標として」捉えたと特徴づける。そしてマルクスは D. ヒュームを「18世紀におけるこの理論の最も重要な代表

者」として、検討の対象としてとりあげるのである<sup>17)</sup>。

さて、マルクスによれば、貨幣は価値の尺度および、流通手段としての2つの機能においては、反対の諸法則に従っているのであって、前者の機能においてはすべてがその自然的材料にかかっているが、後者すなわち流通手段としての機能においてはすべてがその量にかかっている<sup>18)</sup>。

ところで、ヒュームは、もっぱら流通手段としての機能において貨幣を捉えたので、流通する金属貨幣と流通する紙券とでは、その流通数量の増減と物価との関係が逆であることを見逃し外見上の同一性に執われた、というのがマルクスの繰返してのべた批判の内容である。すなわち、かれによれば、諸商品の交換価値を価格として評価する金の価値が低下すれば、物価は騰貴し、その結果、一定価値量の生産物の流通を媒介するために、より多量の金銀が鑄貨として流通するだろう。このばあい目に見える現象は、諸商品の交換価値は同じままなのに、流通手段の増減につれて価格が変動するということであるが、もしこのような外見にとらわれるならば、紙券の流通のばあいの事態、つまり紙券は流通するから価値をもち、紙券のその価値は流通量によって決まるという事態との区別がつかない。——マルクスはこのように鋭く指摘する<sup>19)</sup>。

要するにマルクスは、ヒュームを「もっぱら貴金属の価値そのものの変革、したがって価値の尺度の変革の時期だけを考察」したものとして捉えたが、その結果、マルクスの貨幣数量説の批判は、そうしたものとしての貨幣数量説を意識して行なわれたように解される。すでに言及したが、かれのつぎの命題も、そのようなものとして理解される。

「流通手段の数量と商品の価格運動との関係についてのあらゆる科学研究は、貨幣材料の価値を与えられたものとして前提しなければならない」<sup>20)</sup>〔引用、4〕

こうして、マルクスは、この命題につづく考察において、ヒュームの学徒に

17) K. Marx, *Kritik*, S. 135, 訳, pp. 209-10.

18) *Ibid.*, S. 99, 訳, p. 156.

19) *Ibid.*, S. 100, S. 135, 訳, p. 157, p. 210.

20) *Ibid.*, S. 135, 訳, p. 210. 強調点引用者。

よると「(price revolution のもとでの) 貴金属の価値の減少は流通手段の増加に現われ、流通手段の量の増加は商品価格の騰貴に現われる」と言ったときめつけ、実際にはつぎのような過程が生じているのだと述べている。すなわち、——実際には、まず、流通手段としての金銀ではなく、商品としての金銀と交換される輸出商品の価格だけが騰貴し、この時点では、価値の減少した金銀で評価されたこれら商品の価格は、その交換価値がひきつづき金銀のもとの生産費にしたがって評価される他のすべての商品にたいして騰貴する。しかし同一国内でのこのような「二重評価」は一時的でしかありえず、金で現わした価格は、交換価値そのものによって規定された比率で平衡化され (sich ausgleichen) なければならない、結局こうして、すべての商品の交換価値は、貨幣材料の新しい価値に応じて評価されることになる<sup>21)</sup> (強調点は行沢)。——ここでのマルクスの考察はいろんな意味できわめて興味ぶかい示唆を含んでいる。マルクスの価値論貫徹の視角から price revolution の過程をどう理解するか、というマルクスの意図にそって読んでもそうだし、かれがここではとりあげようとしなかった理論的示唆にかんしてもそうである。この後者の点についていえば、さきほどの〔引用、4〕の命題の論証の過程の中で、かれは貴金属の価値の変化の時点で、「二重評価」の時期の存在を指摘し、そこから貴金属の新しい価値にもとづく新しい斉一な物価体系の確立にいたる平衡化の過程の存在を認めているのである。さきに〔主張(3)〕で指摘したようにこの過程こそリカードが『原理』において「貨幣数量説」むしろ流通手段数量説を援用して描いたものであるのだろうが、マルクスは「こういう過程の展開は、一般に市場価格の動揺のなかで商品の交換価値が自己貫徹する仕方と同じように、ここでの問題ではない」(強調点は行沢)として、この過程をここでとりあげることの意義を否定しているのである。

#### IV-2 リカードの「国際的紛飾」

前項でみたようにマルクスは、ヒュームに代表される貨幣数量説を price

21) *Ibid.*, SS. 135-6, 訳, pp. 210-11.

revolution の時期の現象に捉われた謬論としての視角から捉えたのであるが、リカドゥの『原理』の貿易論における展開も同様の見地から捉え批判しようとしたと解される。ところが、あらかじめ問題点を指摘すれば、地金論争期のリカドゥ理論ならそれでもよいかもしれないが、『原理』の段階のリカドゥ理論は、すでにちがった歴史的背景における異なった事態を問題にしていたものと理解されるのである。というのは、price revolution 期の貨幣の価値の変化は、生産原点における生産費の変化にもとづくのであるが、リカドゥが『原理』で問題にしたのは、非産金国における金以外の財貨における生産性の変化にもとづく貨幣価値の変化である。したがってこうした生産性の変化は、price revolution 期の金鉱山の発見のように技術変化というよりも豊富な鉱脈の発見にもとづいたものではなく、産業革命を経て機械の生産力をみずからの生産力としての現象せしめる産業資本の営みが社会的生産を支配する過程を背景として生じたものであり、国際的にみれば(非産金国) イギリスの産業資本が国際的水準を上廻った生産性を達成し「価値法則の国際的なモディフィケーション」<sup>22)</sup>をひきおこしてゆく事態を抽象化したものとみなしても、こじつけの非難をまねくことはあるまい。

ともかく、マルクスのリカドゥ批判に耳を傾けることにしよう。マルクスはリカドゥの頭を支配していた事実は、「紙幣の減価とそれと時を同じくする諸商品価格の騰貴と」であるとし、「ヒュームのばあいのアメリカの諸鉱山にあたるものは、リカドゥのばあいにはスレッドニードル街の紙幣印刷機であった」としており、ヒュームに対するのと同じような論旨と視角とからリカドゥの貴金属の国際的配分にかんする考察を葬り去ろうとしている。こうして、マルクスはさきに〔引用、1〕でみたようにリカドゥが、無関係な視点をもちこんで問題を混乱させてしまうとして、したがってリカドゥの批判をするためには、「すべての人為的な付随的な論点」を除外し、したがって、「金銀の鉱山を貴金属が貨幣として流通している国の内部に移して」考えることに

22) マルクス『資本論』第1巻第20章「貴金の国際的差異」を参照。

しようという<sup>23)</sup>。つまり、いわゆる closed system で事態を考えようというのである。

このばあいマルクスは〔引用、4〕でのべたところにしたがって、貨幣材料(金)の価値を与えられたものと前提して考えている。そうすると一国内に流通する金の正常な水準は流通する諸商品の交換価値によって規定されている。そして、また、このようなばあいに貨幣量が適正な水準にあるという意味での均衡状態が攪乱されるのは、(i)商品総量の交換価値の総額が増減するかそれとも(ii)鉱山からの金の供給が既存の貨幣の摩滅分を補うべき量以上、または以下に増減するかの2つのケースである。このようなケースにおいて、金の供給の逆方向への増減を通じて均衡化にいたる過程をマルクスがリカドゥの理論に従って推論している箇所をここでさらに再生することはあまりにも冗長となるであろう。したがって、ここでは、推論の過程を経て、マルクスが達したつぎの結論を紹介することにしよう。マルクスによれば——リカドゥはこの推論の過程を辿って証明しようとしたことは、諸商品の価格または金の価値は流通する金の量に依存するということである。しかし、この証明は、およそ貨幣として役立つ貴金属のどんな量も、その貴金属の内的価値にたいする割合がどうあろうとも、つねに流通手段、铸貨にならねばならず、したがって流通する諸商品の価値総額がどれほどであろうと、諸商品の価値章標とならなければならない、というそれ自体が証明を要する命題を前提とすることのうえで成りたっている<sup>24)</sup>。——マルクスは貨幣流通にかんするリカドゥの推論をこのようにいわば砂上の楼閣(論点窃取)としてきめつけ、ふたたび〔引用、1〕と同じ趣旨のリカドゥ批判の見解を明らかにしている。すなわち、いわく、

「もしリカドゥが、具体的な諸関係や、問題そのものからそれる付随的な論点をもちこんだりせずに、われわれがしたようなしかたで、この理論を抽象的に提出したならば、この理論の空虚さははっきりめだって現われたであろう。しかしかれは説明全体に国際的な紛飾をほどこしている。けれども外見上規模が壮大であっても、根本

23) K. Marx, *Kritik*, S. 145, 訳, p. 226.

24) *Ibid.*, S. 148, 訳, p. 230.



的な考えが貧弱であることにすこしも変わりがないことは容易に指摘できるのである。」<sup>25)</sup>

この見解に続いてマルクスは、こんどは open system においてリカドゥの推論を辿るのである。そうすると、金の「正しい水準」からの攪乱がおこるのは、さきに closed system でみた、(i)、(ii)のケースに対して、こんどの open system のばあいでは、(i)ある国に存在する金の量がその国で新たに金属鉱山が発見された結果として増大するためか、または、(ii)特殊な国で流通する諸商品の交換価値の総額が増減したため、の2つのケースとなるわけである。そして、リカドゥによればその攪乱からの均衡化の過程は、さきの closed system では国内での金の生産量の調節という形で生じたが、こんどの open system では、一国から他国への金の流出入という仕方では生じるとしている——このようにマルクスはリカドゥの推論を紹介する。

こうしてマルクスはこの事態にかんするリカドゥの推論の「国際的紛飾」をはぎとってゆく。つまり、このばあい金の流出入をひきおこすものは、つねにもっぱら流通手段の量がその正しい水準以上または以下に膨脹または収縮した結果として生じる金属の減価または増価だけであるとみなされている。そのうえで、ここでもマルクスはリカドゥの推論をきめつけていう。貨幣がさまざまな国で流通するのは、たいていそれがそれぞれの国で铸貨として流通するかぎりだけであり、いいかえれば貨幣は铸貨にすぎず、したがって一国に存在する金量は流通にはいりこまねばならず、こうしてそれ自体の価値章標としてその価値以上または以下に騰落することができるというわけであり、「こうして、われわれは、このような国際的に錯綜した回り道を経て、ふたたび、さしいわいにも出発点である簡単な独断に到達したのである。」<sup>26)</sup>

マルクスは以上のように open system におけるリカドゥの「国際的紛飾」をとり去って、結局、(a)一国のケース、したがって国内に金の鉱山をもつケー

25) *Ibid.*, S. 148, 訳, p. 230.

26) *Ibid.*, S. 150, 訳, p. 233.

スを取りあげ、そして、(b)貨幣の価値を所与とするばあいにおける考察が貨幣の相対価値したがって物価水準、および貨幣の流通量にかんするあらゆる問題の基本形態だとみなし、その基本形態の形へとリカードゥの考察した open system での事態をいわば追いこんで批判を加えたわけである。そして(b)の想定からして攪乱の生じる原因として、open system のばあい、closed system での(i)、(ii)に対応した2つのケース、すなわち、(i)、(ii)に限って考察を行なっているということをここで確認しておきたい。

なお、すでに触れたことであるが、うえに紹介した箇所でもマルクスが引き合いに出しているリカードゥの文献は、『原理』以前のものであることを併せて確認しておきたい。

この項のはじめにのべたように、マルクスの念頭にある貨幣数量説は price revolution 期の現象に捉われた時点において交換価値にかんする考察が社会的生産における価値関係の解明に下降せず、貨幣をもっぱら流通手段としての機能において捉えた時期の理論ないしその変型であったとみなされる。したがって、『原理』以後においてリカードゥが直面していた現実の社会、いいかえれば、リカードゥが表象として思いうかべていた社会において生起する国際間の諸関係との関連で、リカードゥの貿易論における問題の箇所を理論的に批判しつくしていない、という可能性を、マルクスの「流通手段と貨幣にかんする諸理論」は、蔵していたと考えられる。そして日本の「マルクス経済学者」もしかりであった。逆にいえば、リカードゥの『原理』における貿易理論は、そのような限定のうえでの批判からはみ出る側面をもっていたのではないかと疑ってみる必要がある。つぎに、この分野の考察では『経済学批判』を継承した『資本論』に即してこの点を見ることにしよう。

#### IV-3 “幻想的”価値尺度

ここでのテーマにかんする『資本論』の叙述は第1巻第3章「貨幣又は商品流通」の第2節「流通手段」においてみられる。すでに紹介したマルクスの思考と若干重複する部分もあるが、さきにみた『経済学批判』の中の叙述では、

マルクスがとりあげた諸学説の推論がそれともマルクス自身が肯定して自身の所説とした命題かが明瞭でないばあいもあるので、ここで『資本論』に即してマルクス自身の推論としてまとめておきたい。

まず、貨幣数量説については、「新たな金鉱源、および、金鉱源の発見につづいた事実を一方的に観察して、第17世紀および第18世紀において、商品価格はより多くの金と銀が流通手段として機能するに至ったから騰貴したのである、という謬論……」<sup>27)</sup>という見解が示されているように、その歴史的背景としての price revolution との関連で貨幣数量説がとられている。

それでは、この「謬論」に対して、マルクスの理論上の反ばくの要旨をみよう<sup>28)</sup>。まず、流通手段の量は、商品の価値総和とその変態の平均速度とを所与とするとそれじしんの価値に依存するという「自明」の命題を確認したマルクスは、これとは逆の幻想 (Illusion) すなわち、商品価値が流通手段の量によって規定され、この流通手段の量はまた一国に存在する貨幣素材 (金) の量によって規定されるという「幻想」はどのような仮定に根ざしているかを指摘しようとする。すなわち、マルクスによれば、この「幻想」は「その本来の代表者」においては、「商品は価格なく、貨幣は価値なくして流通過程に入り、この流通過程で商品物の可除部分が金属の山の可除部分と交換される」という「無意味な仮定」に根ざしているというのである。

このような見解をもつマルクスは、したがって、『経済学批判』のばあいと同じく、「金の価値は価格評価の瞬間に与えられているという現実にもとて、以下の(貨幣数量説の——行沢)検討においても同様に金の価値は所与と前提」<sup>29)</sup>したうえで推論を進めているのである。つまり、リカドゥ的にいえば、貨幣は自然価値にて流通していると想定して考察が行なわれる。そこで、われわれの問題点は次のようになる。すなわち——『原理』におけるリカドゥの貴金

27) K. Marx, *Das Kapital*, Erster Band, Buch I, イノスティチュート版, S. 123, 向坂逸郎訳, 『資本論』(一), 岩波文庫, p. 225——以下 K. I, S. 123, 訳, (一), p. 225 と略記。

28) *Ibid.*, SS. 128-9, 訳, (一), pp. 233-4.

29) *Ibid.*, S. 123, 訳, (一), p. 226.

属の国際的配分にかんする考察は、マルクスのこのような前提にもとづく検討からはみ出るような事態をとりあげているのではないか、——という問題が提起されるのである。

そして、この事態とは、すでに〔主張、(1), (2), (3)〕でみたように、非産金国における金以外の財貨の労働生産性の変化に伴って生じた攪乱から新たな均衡状態に至る平衡化過程であった。これに対して、マルクスが『資本論』の世界貨幣の項で、したがって open system のうえで、思いうかべていた金銀の国際間の流れはつぎの2つの内容をもつものであった<sup>30)</sup>。すなわち、——一方では金銀はその生産源泉から全世界市場のうえにひろがり、ここでそれぞれの国民的流通部面によって、それぞれの分量によって捕捉されて国内流通路に入るのであって、このばあいの運動は、商品に実現されている国民労働と貴金属に実現されている金銀を生産する国の労働との直接の交換によって媒介される、他方では、金銀は継続して各種の国民の流通部面をあちこちと流れているのであって、これは為替相場の不断の振動につづく運動である。——このように、マルクスの思いうかべていた金銀の国際間の流れのうち、産金国から非産金国に対する第一のものに対して、第二のものは、非産金国相互間の流れとみなしてよいと思うが、その原因としては「為替相場の不断の振動」が考えられているのみである。したがって、〔主張、(1), (2), (3)〕で示した『原理』におけるリカードのケースは、これからみ出す事態であると結論づけてよからう。

それでは、このようにマルクスからはみ出すケースを考えるうえで、『資本論』ないしマルクスの貨幣理論は全然参考にならないかという、すでにIV-1の末尾で示唆したように必ずしもそうはいえない。つまり、open system における非産金国での生産性の変化というリカードのケースは、closed system における生産源における金の価値変化のばあいにあたる。われわれはそれがリカード『原理』の貿易論において国際的「紛飾」をつけて現われているとみなすよりも、国際的な場面でより複雑な諸関係のうえで変容(モディフ

30) *Ibid.*, S. 151, 訳、(→), p. 276.

ィケーション)を受けた仕方で見われているとみなすことによって、簡単なばあいにおける推論を生かすことが可能となる、といえるだろう。

それでは、『資本論』における金の側での価値変化のばあいの考察はどのようになされているのか。この部分<sup>31)</sup>においてもマルクスは金の価値を所与とみなす上述の前提を確認し、むしろその原則の敷衍として推論を行なっているのである。だからマルクスはまず次のように述べる。

「人は、商品の流通部面が一つの穴をもっていて、ここから金が一定の与えられた価値をもった商品として、流通部面にはいつて来るのを見たのである。この価値は、価値尺度としての貨幣の機能、したがって、価格規定においては、前提されている。」

それでは、仮に価値尺度自身の価値が低落すればどうなるか、とマルクスは自問する。そのばあいの攪乱から平衡化への過程はマルクスによればつぎのような仕方では生じる——まず(i)価値尺度自身の価値低落は、貴金属の生産源で直接に金・銀と交換される商品の価格変更に見られる。(ii)これに対して生産源以外では他の商品の大部分がなお比較的長い間、いまや幻想的 (Illusorisch) となって、実際と異なってしまった価値尺度の価値で評価される。(iii)このような攪乱の事態に対する平衡化過程においては、うゑの商品が、他の商品に対して、これに対する価値関係によって影響を及ぼしてゆき、こうして次第に、諸商品の金又は銀で表わした価格は金銀の新しい価値に応じて評価されるようになる。——こうして、この平衡化過程 (Ausgleichungsprozeß) は、貴金属の継続的な増大に伴って起こるのであるが、このばあい金 (銀) はその生産源で「直接に金と交換された商品に対する代置として」流入して行くのであって、したがって、「諸商品の改訂された価格表示が一般化し、またはその価値が新たに低落し、ある点まで低落しつづけてゆく金属の価値に従って評価されるようになるにつれて、すでにそれらの実現のために必要な金属増加量も存在する」、とマルクスは説明する。

ところで、この平衡化過程の叙述は、金の価値を所与とするマルクスの想定

31) *Ibid.*, S. 123, 訳 (→), pp. 225.

のうえで理論的につじつまが合っているが、現実の過程としては必ずしも説得的ではない。というのは、生産源で直接に金と交換される商品（これを商品Aとしよう）を売った商品所有者は、いまや同一量の商品と引きかえに今までよりも多い貨幣（収入）を手に入れているが、そのかれが、他の商品の購入にさいして、何故旧来の価格ではなくて新しい価格に従って支払うかの論理あるいはメカニズムが明らかでない。あるいは、むしろ、それ以前に、何故生産源において金の生産者が商品Aの所有者に新しい金の価値に従った対価を支払うかについての詳しい説明がない。

このメカニズムについてマルクスは、本稿 IV-1 の末尾でふれたところでは「市場価格の動揺のなかで商品の交換価値が自己を貫徹する仕方」と類似したものと考えていたことが示唆される。結局このような仕方は、「二重評価」すなわち「幻想的」となった旧米の金価値で他の商品（労働力を含む）の価格が成立し、したがって金生産の要素の価格もそうである間は、特別剰余価値あるいは（資本制商品のばあい）特別利潤が金生産者ないしは新価値で金を入手したあらゆる生産者や商人に帰属し、結局この状態が全商品生産者ないし所有者に波及する過程として理解されるだろう。その間の平衡化の過程では、競争、需給、数量が調節の働きをするのである。この点をいまの金生産についていえば、新しい金の価値にもとづいて新しい（増加した）流通貨幣量が要求されるが、そのギャップは、現実においては、うえの意味での特別剰余価値ないし利潤のゆえに金の供給（生産）が増大し、そこで金の価格が平価を下廻るようになれば铸造要求が増し、ひいては流通量が増すことによって埋められる。このばあい、流通量が増すことによって物価（貨幣賃金も含む）が新しい金価値に応じた新体系におちつくのである。

いうまでもなく、新しい金価値に応じた流通必要量をこえて金（铸貨）が流通に投げこまれようとしても、これは流通から排除される<sup>32)</sup>。この点にいたるま

32) このばあい金の供給をふやすべき特別剰余価値ないし特別利潤という動機も消滅している。逆にいうと特別の剰余価値ないし利潤は新しい金の価値と「幻想的」となった旧金価値との間のギャップ、したがって「二重価格」が存立する間は続くのである。

での平衡化過程では、『経済学批判』の中でのつぎの一節があてはまる。

「貨幣が単に表象されているだけでなく現実的な物として他の商品と並んで存在しなければならない流通手段としての貨幣の機能においては、その材料はどうでもよいのであって、すべてはその量にかかっている。」<sup>33)</sup>(引用, 5)

以上では、closed system において金鉱山の生産性変化により価値尺度自身の価値が変わったばかりに一時的に生じる攪乱、つまり「二重価格」の状態にさいして、平衡化の過程が生じる仕方について考察した。リカードの『原理』第7章におけるケースは非産金国で金以外の財貨の生産性が変化したばかりには、その国の(輸入)金の入手に要する価値が変わる。この新しい価値に対してしばらくはその国の大部分の商品(リカードの例では生産の改良されたブドー酒を含む)はいまや「幻想的」となった古い価値尺度で評価された価格をもっており、この場合の攪乱はいくつかの仕方で現われるが、ひとつの典型的な仕方では貿易収支の不均衡の形で現われる。このばかりの平衡化過程の生じる代表的なコースをリカードは描いたものとみなすことができるだろう<sup>34)</sup>。

## V リカードと「現代的」課題

リカードは『原理』第7章の貿易論のなかで、いわゆる比較生産費の法則について論じ、そのしめくりとして周知の次のような命題をのべている。

「イギリス人100人の労働は、イギリス人80人の労働に対して与えられるはずがない。ところが、イギリス人100人の労働の生産物はポルトガル人80人、ロシア人60人または東印度人120人の労働の生産物と交換せられうるのである」<sup>35)</sup>と。

本稿ではこれについて行なわれた貴金属の国際的配分にかんする考察をとりあげたが、それは、この引用に即していえば非産金国たとえばイギリスにおいて財貨の労働生産性に改良があり、そのためにこの80人対100人等々の国民的

33) K. Marx, *Kritik*, S. 100, 訳, p. 156.

34) ヒックスはこの点をつぎのように述べている。「19世紀の経済学者はこれらの貨幣効果を特定の貨幣メカニズムの見地から研究した。今日われわれは異なった見解をとることを余儀なくされている」(*Op. cit.*, p. 124)

35) D. Ricardo, *Works*, I, p. 135.

労働の交換比率(要素交易条件)が変るケースであり、これは、マルクスが流通手段の旧来の理論の検討のさいに思いうかべていた事態からはみ出すケースでもあった。このリカードゥのケースで生じる平衡化の過程の基本は、つぎのようにいうことができるだろう。つまり、それは、open system において非産金国Aの国民的生産性の変化に応じてその国の貨幣のいわば自然価値、つまり一定量の貨幣を入手するに要する労働で測った費用、が変る過程であると。逆にいうとその国の一定量の労働、たとえば1労働日の生産物はより多くの金または国際通貨量で現わされるようになる。拙著『国際経済学要論』では、このような特定国の1労働日の生産物の価値の国際価格での表現を国際価値生産性と名付け、収支均衡化の過程の基本は国民的労働の相対的生産性の変化に応じる国際価値生産性の相対比の変化であるとした<sup>36)</sup>。その均衡化の過程は賃金の騰落や固定レート下の為替レートの変更などいろいろなコースをたどるが、リカードゥはこの過程を「特定の貨幣的メカニズムの見地から」<sup>37)</sup>とりあげたわけであり、そのような推論によって今日の言葉でいえば、基礎的不均衡のばあいの均衡化過程の基本を示唆したものと理解される<sup>38)</sup>のである。

このようなリカードゥの示唆は必ずしも明示的とはいえない形で示されていた。この示唆の重要な側面を最近時においてとりあげ発掘したのは本稿のはじめに言及した J. R. ヒックスであったといつてよからう。ヒックスはそこで、「生産性の不均等な発展が貿易に及ぼす効果」を理論的に整理するために、リカードゥの不変生産費の仮説を採用し、いまひとつ、生産性の変化の実質ないしバーター効果と、貨幣的効果とを区別するというリカードゥ流の問題の追求の仕方をも再評価し採用したのである。そのうえでかれは、生産性上昇が、(1)各部門に齊一的に行なわれたばあい、(2)輸出部門に偏って生じたばあい、および、(3)輸入競争部門に偏って生じたばあい、の3つに分けて考察することによって、貿易収支理論の実際問題への適用への途を大きくおし進め、こうして一

36) 行沢健三『国際経済学要論』ミネルヴァ書房、1967年、pp. 61。

37) 注34)参照。

38) 前掲拙著、第4章第3節および第10章第2節(㉔)を参照。



方では現実の事態の解明に途を開き、他方では理論の検証の手がかりを与えることに貢献したといえるだろう。

このヒックスの考察からふりかえると、リカードゥが貴金属の国際的配分に関連してあげた例は、ヒックスの第三のケース、すなわち輸入競争産業に偏向的に生産性の改良があったケースにあたるのであり、この点でもヒックスの考察はより一般的な視野に立って問題をとりあげたといえるだろう。もっとも、この意味での一般化の着想はすでに J. S. ミルにおいてもみられる。すなわち、ミルの『経済学原理』第3巻第18章「国際価値」の第5節でかれは「生産の改良が国際価値のうえにもたらす効果」について考察している。ここではミルの考察は輸出品にかぎられている点でヒックスに比べて一般性という見地からは遠いが、生産の改良が既存の輸出品に生じたばあいと並んで「新たに輸出品を設定するばあい」を考えている点では、ヒックスに欠けていたひとつの論点をすでにとりあげていたといえると筆者は考えている。

こうしたリカードゥ、ミル、ヒックスの理論的命題をよりくわしく比較検討し、またそのうえでドル危機との関連で適用・検証することが残された課題であるが、紙数の都合で別の機会に譲りたい。他面で、マルクスの理論の体系構築の見地からすれば、欠如している貿易理論の構想のためには、リカードゥの貿易および収支均衡化の理論はその後の展開をも含めて、ひとつの源泉として批判的に摂取さるべき面をもつことを強調しておきたい。